

＜研究成果の紹介＞

ミスト条件下での垣根用緑化植物の効率的な挿し木時期

農業研究部園芸グループ

1 成果の内容

緑化植物は利用場面の多様化から、多くの種類を使用する消費ニーズが高まってきております。その一因に、住宅様式の洋風化、ガーデニングブーム等が挙げられます。県内の緑化植物生産においても、多様な樹種の生産を始めています。また、栽培においてもミスト条件下の増殖法が導入されつつあります。

そこで、安定供給のためには苗作りが大切であることから、垣根用として注目される消費ニーズの樹種について、無加温ミスト繁殖室における挿し木適期を検討しました。

用土は、山砂、川砂、ピートモスを2：1：2の比率（容積比）で調整し、容器は、128穴のセル成型トレイを使用しました。

垣根に有望と思われる8樹種について、実用性のある概ね80%の発根率が確保できる時期は、カラタネオガタマで4、12月、グミ‘ギルドエッジ’で5月、トキワマンサクで7、11月が適期であると

考えられました。また、ハマヒサカキは5～8、11～1、3月、ヒメシャリンバイは5～7、11～3月、ベニバナトキワマンサクは5、7～9、1月、リガstrラム‘ピカリー’は年間を通じて挿し木適期の幅が広い樹種であると考えられました。しかしながら、トウネズミモチ‘トリカラー’は、年間を通じて挿し木が困難であることがわかりました。

2 技術の適用効果と適応範囲

緑化植物の挿し木適期が明確になることで、苗の計画生産が可能となり、挿し木増殖の効率が高まります。

3 普及・利用上の問題点

セル成型トレイを用いた場合、容器内が過湿となりやすいので、無加温温室でのミスト繁殖は、通気透水性・保水性が良い用土を利用して行う。

(千田 泰義)

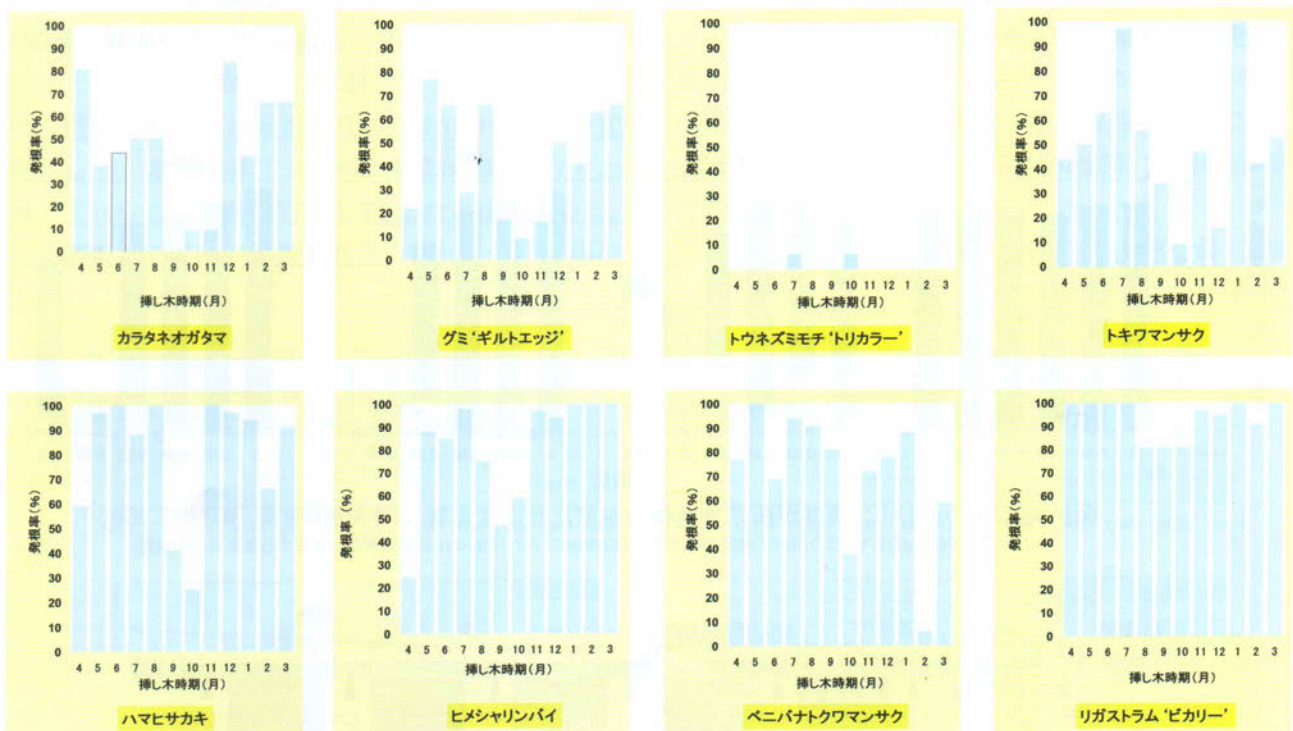


図. 垣根に有望な緑化植物の挿し木による時期別発根率